

戦没者遺族会への聞き取り調査（記録）

田辺（邊） 鉄男さん

小林先生：戦時の話をお願いします。

田辺さん：私はあの富山県出身です。

小林先生：富山。はい富山のどこですか。

田辺さん：富山の市ですわ。そのなかの一番中心の所です。総曲輪というところで生まれた。

その、そこであの戦争終戦を迎えたのはね。小学校2年生。

田辺さん：終戦になったのは小学校2年生ですわ。

僕の生まれたところの近所が、京都でいうと京極みたいなところ。立派な町じゃないですけどね、富山市というのは小さいですけども、賑わいからいったら京極みたいな。通りもちょうど京極通りに相当するところに家があった。

家の稼業は竹細工師なんですよ。

そういうあれで、ほんで親父で3代目になるはずだった。3代目になるはずだったのは戦争でなくなりました。

戦争に行ったのは昭和16年。16年、多分あれは9月だったと思うんですけどね。太平洋戦争が始まる3か月かそのちょっと前。用意も大変。赴任したのはまあ満州。当時は戦争、アメリカと開戦してませんから海はおだやかで確実に行けたはず。

で、満州はねえあちこち転戦しとるんですよ。

兵役はねえ、兵役ゆうたら、あの役割は、あの輜重隊ですわ。

小林先生：輜重隊、はい。

田辺さん：輜重隊というのは、物運ぶやつやね。でとにかくえげつない寒いところだったというように、最初にいったのは満州のはずれの方、ソ連との国境。そこで、そこにいって。最初の時の手紙がねちょっと軍隊の様子ちょこっとだけ帰ってくるんですよ

ソ連兵が見えると見えましたが書いてあったから、そんな近いんかないうて夜中の内に敵の望楼ゆうんですかね、あれが移動しよる。こっちにが一つ。そんな間近やと目離せられん。襲って来よるかもしれない。撃ったら最期はじまるさかい。

撃たずに睨みあつとるゆうなことははがきに書いてありましたけど。はがきが何通かずとあつたんですけど、とってましたけど。富山からこっち引越し

してくるとき、どこいってしもたか、一枚しか残ってない。

終戦になった時には、戦友が帰ってきて戦友がうちに訪ねてきよるんですが、大丈夫帰ってくると。別れるときには生きとった、元気だったよということいってくれたんですが、それがどういうことか、最期にきたのは死亡通知だった。戦死したのは昭和 20 年 12 月なんですよ。

小林先生：20 年 12 月。終わってからですね。

田辺さん：12 月になってるんですが、それがねその後ぱらぱらと帰ってきた人達に話を聞くとね、病気で死んだ。ハルピンの陸軍病院で死んだいうことになっとるんですが、ハルピンの陸軍病院で死んだという人もいれば、いや集団脱走して銃撃されて死んだという話もあれば、どれがほんとかわからへん。つかまって銃殺されたという人もいる。名前が同じ人だったんちゃうかという話もでてましたけどね。

いずれにしたって昭和 20 年 12 月に亡くなったということが、その通知があったのが昭和 22 年ころですね。

小林先生：通知をもらったのが 22 年。

田辺さん：紙はってた、お骨に貼ってあった紙昭和 20 年 12 月 20 日。それを命日として、しとるんですけど。

うちの近所はね終戦前まで終戦までは、ものすごくいい町で隣近所付き合いがほんまに家族みたいでした。

いよいよ昭和 16 年、親父があ戦争に出かけていくという年に、まあえらい出征していく人がいて、前にですね、もう皆ばらばらになるから、町内会の会長がとにかく最後の町内会の運動会をやるとうことで、大運動会をやった。それで声をぜんぶかけて。僕んところは真ん中の総曲輪って行くことですから、総曲輪地区全部かけると近くんところ、そらまあ駅の近くまでなるんですよ。広い。

ほんで僕の叔父も戦地へと駆り出されて、最初はね行ったのは志願兵としていった。

小林先生：ああ志願兵で。はいはい。

田辺さん：まだだから 10 代で行った。それが、いわゆる 17 年やったか 18 年やったかね、アメリカと戦争をやり始めて。

小林先生：16 年。

田辺さん：あの日本海側はもう投降するのはおらんかったもんで。

それが生きて帰った。ようするに任期明けて。あのときなんで行とったんやったかな 3 年で任期ですか、2 年で任期でしたか、僕もようしらないんですけど。とにかく海に投げ出されて筏につかまってあの助かって帰った。

それでよせばええのにそのおじさんは、俺の親父の弟さんはもう一ぺん行っと

るんですわ。それは召集もらっていったんですけど。
それはインパールってとこ。そのインパールでもね運が良かったのは前の経験があるのと、年もちょっと。
インパール、このまえ新聞にのっとった。どうもおじさんの話聞くと、インパールの奥へ行ってないんですよ。ビルマへと運ぶあの鉄道をつくってますね。ビルマのあの鉄道工事に従事しとったみたいですね。
だからあの鉄道にね乗ったとゆうことを言うてましたわ。
ほんで帰ってきたのはよかったんだけどね、帰ってきたときはマラリアにかかっとしてね。それは大変なもんでしたね、もう気が狂ったようになるんでね。それがもとでマラリアで苦しんで自殺した。
だから親父はいない、弟はいない。それにあの兄弟がですね女兄弟が多かったんですけど、全部で七人兄弟だった。七人で。
でしっかりしとたのが、お父さんの妹さんの方がしっかりしとった。
そういう髪結い美容院ですねそこへ修行しに行っとして。
日本髪をゆったりなんかする、そういう修行をやっとして途中から、終戦ちょっと前になったらパーマネントの修行をやったりして、それであの飯食えた、その小遣いで。
うちはかご職人ですから、そのかご職人も当時はね景気が良かったですよ。
弟子が、かご職人の弟子がね3人か4人おりましたね。
小林先生：人を使われてた
田辺さん：だから八畳間十畳間ぐらいのお店やって、そこが仕事場になってて。それがだんだんだんだん戦争の間際になって、戦争が苦しゅうなってくると、弟子がみんな出征していくわけ。そしたら仕事もできひんわけ。
だからおじいさんとおばあさんだけでやってたら、とても出来ないの、おふくろも一緒に入ってやってましたわ。
当時の竹細工っていうのはおじいさんは芸術品をつくる、ほんとの工芸家でしたけど、あとおばあさんとうちのおふくろとでやるんだけど。
百姓さんやったらご存知やと思いますけど、ようするに腰に入れる腰カゴ、いわゆる田植用に使う腰カゴ。
小林先生：ああいうものですね。
田辺さん：それとか体に背負った大きいやつ。あとは婚礼の時に果物入れるかごとかね、そういうものをね作っとして。
だから仕事は十分そのときあったんです。
それが戦後になってから、プラスチック成型ができて、全然仕事は無くなってしもて、飯食えなくなっちゃった。
叔母が美容院やっとしてそれの方が助かる、助かったんですけど。

戦後はとにかく戦争中よりも哀れでした。

戦争直前、あの終戦直前の最後に戦地行った、僕覚えとるんだけど、隣のおじさん、寿司屋さん。

寿司屋さんのおじさんというのが若いのにねほんとにね、いくつぐらいだったかな十歳ぐらいの時だったかな、それが僕をよんでね、最後にねお寿司、配給でお寿司を握ってくれた。

小林先生：富山はね空襲をうけてると思います。おうちはまともうけてます？

田辺さん：うけてます。

小林先生：うけてますよね。

田辺さん：うちは職人の家でしょ。うちの家は職人の家ですから、土地はね借り土地借地、家も借家。

そういうところで生活しとったから、燃えてしもうたら行くところない。

小林先生：どうされました

田辺さん：そこのもとの地主のところに相談に行ったらね、地主がもう貸さん。やっと自分の土地に戻ってきたから貸さん。全然いう事を聞いてくれないので、市役所に相談に行った、その時、市役所に世話してくれ、やってくれたらよかったんだけどもモタモタモタモタ。

ようするに帳面からなんもかんも全部燃えてしもとる、土地の登記。

厚かましい人になるとね、その人の土地にね平気で家をたててね。

それで帳面が恐らく消えてしまうから、なくなってしまうから登記簿もなんもない。だからそこで居座ってしまった人が何人かおるんですよ。

うちの親父っていうかじいさんは真っ正直だからね、絶対そういうことやろうとしないんですよ。

ちょっとでもなにか、目印かなんかでもたてといたら権利が出来るから、そこでそれを貸家がたつた、貸家にしまおうやないかと、みんなが。

だからもう終戦後の方が大変ですわ。

小林先生：結局どうされた

田辺さん：だからそれはうちのおばあさんが、実は笑わんとほしいねんどもうちのじいさんとばあさんが大恋愛で結婚したんですわ。

それがうちのじいさんは浄瑠璃師なんですよ、浄瑠璃師。

それに惚れて結婚したんですけども、そのおばあさんは名家だったんですけども、勘当されてしもうとるんですよ。

そこへは相談にはいけないんだけども、そしたらその親戚っていうかね、そのことを知るとる人がいましてね。

そのとこに嫁いでいるおばあちゃんのいとこが、そこへ嫁いでましてな。

そのとついでどつた嫁ぎ先がああ男爵。戦争中の男爵、伯爵とかその華族さんで

すわ。大きな屋敷やったわけですね。それを切り売りしよったんですね。それ以降世話してもらって金の方はあとでいいよと言うてくれて。そこ、35坪やったかな、そこにバラックを建てて生活してた。

小林先生：そこはどこですか場所。

田辺さん：そこは街の中。富山の街の中。

そこはもう屋敷町ちょうど屋敷町のあとですけどね、海軍のあれ敷地があったそういうところにあった。

結局うちのおふくろは日銭を稼ぐために闇屋。それはもう今の若い女の人は出来ない。トラックをチャーターして。当時のトラックは皆さん覚えてはりますか、トラックは木炭自動車でしょ。

木炭自動車で山へね、何をとりにいくかゆうたら薪を買いに行くんですよ。

小林先生：薪、薪を。

田辺さん：その薪をトラックに積んで海岸へ売りに行くんですよ。海岸の方で塩をつくった。

小林先生：ああ塩をね。

田辺さん：塩は統制かかっちゃった。薪も統制にかかっちゃった。それを夜中に走るとなるとすごい量になる。

トラックで行って買い付けてほんで、それを持ってきて、塩を担いで塩をトラックの隅にかくして、ほって持っていく。

小林先生：闇市とか

田辺さん：塩を売るところ、塩をつくっているところ。塩は農家へ

小林先生：農家へ持ってく。

田辺さん：塩と米を交換する。米を売りに行く。米を売りに行くときに僕らを使うわけ。僕はあの当時小学校、2年か3年になってましたね

そんな時は重かったけど4キロのコメをリュックサックに入れていきましたわところが列車が来ると、見分けとるんですよ。ちゃんと合図する人がおって、逃げるんですよ。

電車とびおりてね田んぼの中をはしって、こう伏せをしてね、身をかかして。遠くを見とったら、おふくろが捕まったりしとるわけですね。

とにかく終戦後の方がひどかった

戦前、戦前はまだねそういう助け合いの精神がまだあってね。

爆撃とかああいうの怖かった。とにかく爆撃とかそういう話をすると、自分たちが爆撃されるいう前の晩、昼、昼間にいきなり飛行機が入ってきて、ビラままいていきよる。今晚あたり爆撃するよという。

ところがうちのおふくろと、おふくろだけかな、おふくろとおじいちゃんがそこにいて、ちょうど今日配給のじゃがいも、さつまいもの配給がある日やから、

それをとってリュックサック背負って明日の朝帰る。

僕はその日のうちにちょっとだけ持てるものだけ持って歩いて、疎開先まで行った。その時ね疎開はちょうど小学校が夏休みはいった、小学校みな閉鎖になってね。

小林先生：どこに疎開されてましたか

田辺さん：そこからね、山陸からより離れた山の方。

小林先生：山の方。

田辺さん：疎開してましたね。そこへかついで行ったんですよ。ちょっとまだ持てるもの有ったから持って帰った。

そうしたときに B29 がきよった、これもう恐ろしいというか悪魔ですわ。

もう空中、うちの県がありましたらこの、この真ん中に呉羽山ってゆう山があった。呉東と呉西とにわかれとる。呉東というのが東京方向、東の方、呉西というのが関西、ほんで真ん中に小さな丘陵地帯。

飛行機がね海の方から入ってきて。下からこう飛行機が回る。10 機編隊ぐらいでね、小さい半分に切られているところをこうぐるぐる回る。それ飛行機と飛行機の羽がぶつかるいうかと思うくらい。

だから日本の戦闘機はその時は1万メートルまであがれなかった

小林先生：あがれないですね

田辺さん：だから迎撃できなかったっていうことゆうとる。1万メートルどころか、すぐのどこまできてますわ。

小林先生：あの時期になると。

田辺さん：なめられているというかそこから爆弾を、まあ焼夷弾ですね、あれをバラバラバラバラ豆まきみたいにまくんですね。もうあつという間。

僕はもうとにかくその時疎開先まで逃げてましたから。

その逃げたところから、おばあちゃんが爆撃で、それすぐに外へ出ろと。

こっちもくると思わなんだから逃げる用意しろゆうて、僕と弟と妹とおばあちゃんの4人ですから、そこにおったら荷物だけかついで、見上げたらそんな状態でしょ。飛行機が真っ赤火ですよ。火に燃えて。ものすごい灰、ものすごく、とにかくもうぐるぐるぐる回っているわけです。

これでもかこれでもか。そういう状態で朝になったら向かいの借りてる農家の人がおじいさんが、そこも兵隊に若い人が行ってる。その次のおじいさん。

おおおじいさんっていうのもおったんやけど、小さいほうの若い方のおじいさんが富山燃えてしもたゆうて。

お前ん所のお母さん帰ってきてへん。死んどるんちゃうか、探しにいつてこい。

それで僕小学校、当時爆撃受けたときにね。そこの兄ちゃんが僕より2つ上の兄ちゃんがついて行ってやると2人で。

歩いたんですよ。ほんなら途中でね偶然おふくろと爺さんに出会ったんですよ。ほらもうズタズタ。ほらもう火の中くぐって逃げとったんちゃう。

そらあもうえげつない、おじいさんもうそれ以来手を付けないんですよ。

僕もその後焼け跡片づけて、焼けたんを取ってこい言われて、おじいさん言うんですよ。小学生によう言うわ。儂は今だって思うんですけど、あの時必死だから取りに行くんですよ。

ほなね終戦の直後なんかないんやけど、爆撃されてしまった後、艦載機がくるんですよ。艦載機が来ると、艦載機銃撃しますからね、近くに必死に溝のどうろの溝のところに伏せて、その時だけ打たなかったですわ。

小林先生：それは状況を見に来たんですかね、おそらく。空襲の状況を見に来た。

田辺さん：その前は艦載機が来てる。小学校だろうがなんだろうが無茶苦茶撃ってましたよ。当たったら、こんな、こんな玉ですからね。穴開くんですよ。

出たところの穴なんてこんな穴ですよ。

そんなん平気でやるようだからね。なんという人間や、思いましたわ。

終戦になってから一番こう政治的なこというたらあかんねんけど、やっぱりねそういう責任は誰がという追及。やっぱり国にあるんですよ、そういう人たちが、今度我々が就職しようと思ったときには大学まで行きたかったけれども僕は大学いけなかった。金がないから。

そしたらね就職しようと思ったら今度就職はね、親のいないもんはダメなんですよ片親ではダメ、弟もあかんかった。

僕は幸いなことに保証人たってくれたん校長ですわ。学校の校長言うのはたいへんな役割してくれたんやな。弟もそういうふうに学校の校長のあれで就職してくれましたわ。

小林先生：ありがとうございました。